2024年1月14日

説教題「わたしは見る」ヨブ記19章23～26節、第一テサロニケ5章9～11節

主任牧師　加藤　誠

「わたしは知っている／わたしを贖う者は生きておられ／ついには塵の上に立たれるであろう」（ヨブ記19章25節）

クリスマスから正月にかけて、わたしは親しい二人の人を主の御許に送りました。一人は父で、この１月２日に９１歳で生涯を終えました。年末の約一週間、家族が父の周りに集まり、聖書を読み賛美歌を歌いながら最期を看取ることができたのは大きな恵みでした。喪失感と悲しみはありますが、ある程度納得できる死でした。もう一人はシンガポール国際日本語教会の四十代の女性です。いつも明るく溌剌と教会の働きを担っておられる方でしたが、クリスマス前の夕方、交差点の横断歩道で自動車にはねられ即死だったとのことでした。その訃報に耳を疑い、言葉を失いました。「神さま、あなたはなぜですか？彼女を必要とする人がたくさんいたのに！」。納得できる理由を見つけることができず、今も彼女のことを思うと心がざわつきます。

人は誰もが必ず死を迎えます。それは厳然とした事実です。が、その死のありようは実にさまざまです。受容できる死もあれば、とても受け入れられず納得できない死もある。今回の能登半島地震でも多くの方の命が失われました。突然の死。これまでの関係がいきなり断ち切られるような死。無念の死。これまでが根底からひっくり返されるような死。多くの受け止め難い死が引き起こされていることと想像します。

そのような様々な死のありようについて、聖書はどう語っているのでしょうか。

一つは「すべてに神の時がある」というコヘレト3章11節の御言葉です。「神のなされることは、みな時にかなって美しい」（口語訳）。死は、私たち人間には動かし得ないものであり、私たちには受け入れがたい死があったとしても、神さまの働かれる時の中で「すべては美しくされる！」というのです。なぜなら神は愛なる方だからです。新約聖書ローマ8章38節以下で使徒パウロはこう語っています。「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも…他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」地震や津波によるどんな悲劇的な死も、神の愛から私たちを引き離すことはできない。なぜなら、私たちが経験する悲劇の中に、インマヌエルの主が共にいてくださるからです。どのような死であったとしても、キリストの恵み、神の愛の伴わない死はないからです。

今朝ご一緒に読んだヨブ記19章は、不条理の苦難の極みにあったヨブが叫んでいる言葉です。「わたしは知っている。わたしを贖う方は生きておられ、ついには塵の上に立たれるであろう。…わたしは神を仰ぎ見る」。「塵」はヨブが置かれている不条

理の苦難そのものを意味しますが、その只中に「わたしを救い出す神が立ってくださる！その神をわたしは見る！」とヨブは叫びました。このヨブの叫びは、旧約聖書の中で「キリストの十字架と復活を先取りする告白」と言われています。主イエスはこのヨブの叫びに応える方として来てくださったのです。

今から 50 年ほど前に天に召された鈴木正久牧師という方がおられます。57 歳にしてすい臓がんの告知を受け、一か月で帰らぬ人となられました。その鈴木先生が入院したばかりの時のことを次のように書いておられます。「わたしは今、この世の生涯の終わりに立っています。この病院に入院した当初は、私にとっての『明日』は、病気が治ってもう一度今までの働きを続けることでした。教団の中からも、教会の中からも、自分の家庭の中からも、自分がスポットいなくなるなどということを、念頭に浮かべたことはありませんでした。つまり、今まで考えていた「明日」がなくなってしまったわけです。明日がなくなると、今日というものもなくなります。そして急に何やら暗い気持ちになりました。しかし夕方、怜子にフィリピの信徒への手紙を読んでもらいました。パウロが、自分自身の肉体の死を前にしながら、非常に喜びあふれて、他の信徒に語りかけているのを聞きました。パウロは生涯の目標というものを、自分の死の時とは考えていませんでした。それを越えて、イエス・キリストに出会う日を生涯の目標にしているのです。それがほんとうの「明日」です。ほんとうに輝かしい「明日」なのです。地上でもう一度、跳び回るとか、仕事に戻ることを越えて、しかし死をも越えて、先に輝いている本当の「明日」というものを見出した時に『今日』というものが、今まで以上に生き生きと私の間の前にあらわれてきました。イエス・キリストの光と慰めと力とが日々新たに私を支えてくださり、死を待つのではなく『キリストに出会う』その日に向かって生きていく導きを与えてくださっています。」

私たちにとって「死」は最終ゴールではありません。肉体の死を越えてキリストに向かって生かされる希望を、私たちは「十字架と復活の主」からいただいているのです。死が最終ゴールであるなら、それが悲劇的なものであると、それまで生きてきたすべてが無意味なものにされてしまう気になりますが、そうではない。キリストと出会う。キリストに向かって生きる…という最終ゴールを見据えているなら、どんな死に襲われようと、どんな悲劇に飲み込まれようと、揺るがされることはない。キリストがあらわされた神の愛と神の希望は、どんな悲劇にも呑み込まれてしまうことなく、光輝き続けるし、私たちが経験する深い不条理の中にも、神は美しさを与え、神の愛をあらわしてくださるからです。

日々いろいろな意味で衰えていく命を生き、最後はどうあがいても土の塵に帰って行く命であったとしても、私たちの命に美しさを与えてくださる神の愛にしっかりと結びつけられていきたいのです。最後に第一テサロニケ 5 章の御言葉を読みます。